

造形教育における美術鑑賞の指導法 (3)

— 「学校美術館」における鑑賞活動 —

Teaching Method of Art Appreciation in Art Education (3)

— Activity of Appreciation in “School Art Museum” —

山田 唯仁
YAMADA Yuito
(岐阜大学大学院生)

加藤 司
KATO Tsukasa
(岐阜大学大学院生)

辻 泰秀
TSUJI Yasuhide
(岐阜大学)

1. はじめに

平成23年度から、アーティストたちが学校に作品を展示し、地域の子どもたちに美術鑑賞の機会を提供する「学校美術館」の実践に取り組んできた。本稿では、平成28年度の「学校美術館」におけるギャラリー・トーク（鑑賞教室）について述べる。10月上旬から1校あたり3～4週間の会期で、毎年度3校の割合で巡回してきた。28年度は、既に岐阜県の笠松町立笠松小学校で2回、本巣市立本巣中学校及び本巣小学校で2回、愛知県の弥富市立十四山東部小学校で1回のギャラリー・トークを実施し¹⁾、愛知県の江南市立宮田小学校でも2回を予定している。28年度の「学校美術館」に出品しているアーティストは22名である。

ギャラリー・トークは、通常の学校の授業日に行うため、出品者のうち時間の都合のつく人が5～10名程で担当する。子どもたちが2～3のグループに分かれて、アーティストがティーム・ティーチングを行うことが多い。展示のスペースや展示方法等によって、ギャラリー・トークの内容は変化する。たとえば油彩・水彩・テンペラをはじめとした平面作品と、石彫・木彫・ガラス工芸等の立体作品等に分けて、ギャラリー・トークを行う場合がある。また、学校により、その授業時間に参加する人数によって、ギャラリー・トークの形態が異なってくる。学年全体の多人数が対象のときには、作品やアーティストを取り巻くようにして賑やかな雰囲気になるし、一つの学級を複数のグループに分けたときには、一人ひとりと対話をする鑑賞活動になる。1時限（小学校で45分・中学校で50分）の場合と2時限続きの場合とでも、活動の様子は相違がある。

学校の教室等に本物の美術作品を展示し、アーティストが子どもたちと交流をしながら語り合うことは、普段とは違う特別な光景であり、子どもたちの意欲的な鑑賞の様子が多く見受けられる。そのギャラリー・トークの実践内容について、ここでは2名の若手アーティスト及び実践者の視点から報告する。(辻)

2. 作家と子どもの交流を軸として展開するギャラリー・トーク（実践者 山田唯仁）

2-1 ギャラリー・トークの実践報告

「学校美術館」において、筆者自身が制作した絵画作品を展示しギャラリー・トークを行った。本実践は鑑賞活動を通し「制作者である作家」と「子ども」との対話を生むものである。本企画を主催する辻泰秀の「学校美術館」¹⁾のように、鑑賞教育において作家と子どもとの対話を試みるという実践は他にもあげられる。例としては、村上タカシによる「IZUMIWAKUプロジェクト」²⁾や、NPO法人芸術家と子どもたちによる「ASIAS『Artist's Studio In A School』」³⁾などがある。また、作家との連携による鑑賞教育を学校の単元計画の中に位置づけようと試みたものとして、

加茂千景と高橋智子による「作家と連携した鑑賞授業の取り組み—静岡大学教育学部附属島田中学校での実例研究—」⁴⁾がある。これらのような鑑賞教育の形態や機会の多様化に伴い、各実践例の報告が求められている。しかし先行的な実践が充実していく一方で、進行役として参加した作家による教育支援を念頭においた考察は少ない。よってここでは、作家と子どもの対話を軸とするギャラリー・トークが、鑑賞教育においてどのような役割を果たすのかを検討する。

本ギャラリー・トークで展示した絵画は3点であり、いずれも油彩画である。また作風は、画面上に設定された光源による強いコントラストと、遠近図法による奥行きが強調された風景画である。また、筆者が作品制作で使用した油絵具や筆、パレットなどの制作道具を持ち寄り、絵画作品とともに展示した。



図1 作品展示の様子

実践におけるギャラリー・トークは、進行役が一方的に作品の説明をするのではなく、鑑賞者の意見を引き出し、相互の活発な発言により鑑賞が展開していくことを方針とした。参加した子どもは1年生から6年生まで、様々な学年の小学生である。一回のトークごとに同学年で編成された一つのグループを担当し、同スペースに展示をしている他の出品者と担当グループを入れ替えるように進めていった。1校目である笠松町立笠松小学校では6グループ、2校目である本巣市立本巣小学校では4グループと合計10グループを担当した。一グループにつき一回とし計10回を行った。各々の実施時間は10分前後であった。なお、3校目である弥富市立十四山小学校では2回を行ったが簡略的なものであった。

(1) 笠松町立小学校での実践（講義形式）

笠松小学校における実践は、一回のギャラリー・トークにつき一つの学級全員という大規模のグループを対象としており、人数は20後半から30後半までと幅があった。大人数を対象とすることから、講義的な形式により行うこととなった。進行役による語りや問いかけに対し、子どもが自身の考えを発言するという形を基本とし進行していった。

ギャラリー・トークが始まるにあたり、まず「この絵は何で描かれているでしょう」という問いかけをした。クイズのような問いを子どもに投げかけ興味を引くことは、積極的に参加をする雰囲気を作ることでできる有効なものであった。雰囲気作りは相互の対話を活発にさせるためにも重要であると考えられる。なお、作品がどのような材料で描かれているのかなどの知識的内容を問いかけることには賛否が問われる⁵⁾。本実践では子どもの反応に応じて、作品に関する知識や、制作の意図などを述べることにした。問いの後に、作品は油を原料としている絵具で描かれている



図2 絵を指さして感想を述べる子ども

ということ話を話し、瓶に入っている乾性油や油絵具のチューブをみせた。すると子どもたちは「本当に油なの」という驚きの声を上げていた。瓶をゆすり乾性油のとろみをみせると、油であることを実感し再び驚きの声を上げていた。

このやり取りを導入とし、ギャラリー・トークは作品についての鑑賞に入っていった。これにあたり、まず好きな作品を選ぶ時間を用意した。30秒ほど後、気に入った作品に指で示すよう求めた。すると、子どもたちはそれぞれ好きな作品を見つけ、指をさしていた。このときの数の多さをもとにトークにおいてどの作品を重点的に扱うかの目安とした。回ごとに違いはあったが、選ばれた作品の割合に大きな偏りは起きず、展示した全作品である3つを扱うことがほとんどであった。

作品についてのトークは引き続き、筆者の語りや問いかけとそれに対する鑑賞者の応答を基本とし、反応に応じて全体での意見交流を行うなどして展開していった。作品のポイントと考えている点を指で示しながら問いかけると、子どもらは自分の考えを発言していた。動画に記録された場面を例としてあげる。なお、この場面は図3の作品を鑑賞の対象としている。



図3 展示作品

筆者：ここをみてください。(絵を指で示しながら) 階段がありますね。階段を上ったところはどうなっていますか。どんな感じがするかな。

児童A：(そこは、他の部分と色が違って)青い。

児童B：不気味な感じがする。

筆者：そうですね。綺麗だけど少し怖いという不思議な絵にしたいと思って描きました。

上記のようなやり取りが多く場面で行われていた。作者の意図をなぞるという展開は、制作の思考過程を知ることができるという鑑賞教育における面と、安定したトークにより子どもらを落ち着かせ学級をまとめやすいという授業指導的な面の2つの良点があった。だが、この展開を主とすることは、個々の感想を無視することにつながり、一方的な解説という傾向が強くなる。このような留意すべき点があるが、ほぼ同じ内容の問いかけにおいて、ある児童の独特な感想が全体に広がったこともあった。次に別の回における、特徴的な場面をあげる。

筆者：ここをみてください。この階段を登っていきます。すると(階段を上るように指を動かす)。

全児童：(絵を探るようにみつめ、各々が小声でつぶやく)

筆者：青く、モヤモヤとしているかな。(この部分だけ) 別の世界になっているのかな。

複数の児童：青い。紫色。

児童C：たぶん、朝になるのかな。

この児童Cによる発言には、筆者や全ての子どもが耳を傾けて聞いていた。おそらく初めに紹介した3作品のうち1点である「朝日が描かれた絵」を関連づけて発言したものである。展示した作品のうち2作品は、児童Cの発言が完全に当てはまる物語性のある連作であった。しかし、トーク時に対象にしていた作品はそれらではなかった。これは制作者である筆者にとって予想外の反応であり、明らかに児童Cが感じ取り、自身で考えた感想であった。児童Cに、どのように感じ考えたのかを語ってもらうことを試みたが、上手く導くことができず発展しなかった。しかし、このように作家が想定していない意見が鑑賞者から生まれ、作家自身が受け取り手の考え方を知らうと、さらなる問いを投げかけること、そして意見を交互に投げかけることを全体に広げていけば、より多様な展開を導くことができたと考えられる。

講義形式におけるギャラリー・トークでは鑑賞者の人数が多ければ多いほど、どこまで発言を取り上げるべきであるのが難しく感じられる。人数が多ければ、それだけ多様な反応が生まれる。しかし全てを取り上げることは不可能であり、子どもの眩きの中からある意味では選別をしなければならない。ここにおいて、子どもの反応や気づきから、柔軟にトークを展開することが求められる。鑑賞者ごとに異なる発言が自然に反映され、かつ学級という集団のまとまりが保たれなければならないということには、ジレンマを感じた。

(2) 本巣市立本巣小学校での実践 (対話形式)

本巣小学校の実践は、笠松小学校から2週間ほど後に行われた。笠松小学校での実践の結果を反映させつつ、今回の講義形式とは異なる対話形式のギャラリー・トークを行った。本巣小学校における実践は、一回のギャラリー・トークにつき10人程度のグループであった。比較的少人数であることから、進行役と鑑賞者という相互の役割を必要のある程度に抑え、その場にいる全員で絵を囲み意見交流をするなどより対話的な形式により行うこととした。子どもの状況に応じて展開が柔軟に変化することを前提に、立ち歩きながら鑑賞することを基本とした。

こちらの実践ではまず導入として、好きな作品を自由にみる時間を1分ほど設けた。子どもたちは散らばり、各々が気に入った作品の前に移動し間近で見ていた。子ども同士で話し合いながら意見を交流する、喋らず作品を集中して見つめるなど、鑑賞への姿勢は様々であった。話されていた内容としては、「僕はこの絵が一番好き」という感想や『「描かれているものは」入道雲だ』というモチーフの発見について、「『描かれているモチーフである人工物が』壊れているよ」という細部の表現を示すものもあった。自由に鑑賞するという導入の時点で、すでに意欲的な鑑賞が行われ様々な交流が生まれていた。このまま自由な鑑賞を続けることも有意義であるが、今回は場の雰囲気に応じてタイミングを見測り終了とした。

その後一度全員を制作道具の周りに集め、道具がわかるように見せつつトークをした。ここでは画材を実際に手に取らせ触れるという体験を行った。美術館では完成された油彩画を鑑賞することができるが、油絵具や筆といった制作に用いられる材料や道具に触れることはできない。制作道具を自分自身の目で現物として見る、手で触れることは重要な体験となる。子どもは『「絵の具のチューブが」重く大きい』、「匂いがする」などと呟いていた。このように、絵画作品と制作道具の両方を用いることは活動への興味を一層引き出すものであった。その後、作品についてのトークに移行した。自由に鑑賞する時間に子どもが多く集まっていた作品を、重点的に扱う対象とすることとした。

トークは全員で各々の作品の前まで移動し、進行役と鑑賞者が共に作品を囲む体形で繰り広げられ、相互に意見を述べ合う形で進行していった。これにより笠松小学校ではなかった形の対話が見られた。その1つに、図6～8のように、進行役と鑑賞者が交互に、ときには同時に手で示しながら意見を述



図4 自由に移動し作品を見る子ども



図5 道具を手にする子ども



図6 作品のポイントとなる点を子どもに指で示す



図7 気になる点を見つけ、考えを周囲に向け発言する子ども



図8 進行役と鑑賞者が互いに手で示し、意見を述べ合う

べ合うことで展開される場面があげられる。笠松小学校では、進行役である筆者が作品を指し示し語る場面が多く、鑑賞者が作品の部分の指し示して語ることのできる場面は少なかった。これは授業のような講義形式であったということ、子どもと作品との距離が物理的に離れすぎていることが要因であった。今回の実践のように作品の近くへ寄り、それを取り囲む体形でギャラリー・トークを行うことは、より具体的な意見の交流を促す場合において有効であったと考えられる。

例として、笠松小学校の実践報告で述べた図5の作品についてのトークが、本巣小学校ではどのように展開されたのかを下記にあげる。

児童D：ここはどうなっているのかな (階段の部分の指でさし示しながら)。

筆者：ひび割れている様子が描かれています。

児童D：あ、本当だ。

筆者：では一度遠くから、離れてみましょう。その部分がはっきりとみえてきます。

複数の児童：本当だ。遠くからみたほうが好き。

例にあげたような「絵から離れて鑑賞する」という活動は、この回のやり取りにおいて初めて生まれた。この展開は子どもの発言に応えようという発想から生まれたものであった。部分を指すというような具体的な意見による対話は、子どもの考えが理解しやすく、柔軟な展開を実現できると考えられる。このような内容を主とし、本巣小学校におけるギャラリー・トークは行われた。



図9 作品から離れてみる様子

2-2 作家を進行役とする鑑賞教育の可能性

実践を行い、作家と子どもが対話することには様々な可能性があると感じられた。基本的に美術館には美術作品は展示してあるが、それらを制作した本人はいない。作品について語るものは、学芸員などのスタッフか、壁に貼られたキャプションである。本実践のように、作家が自身の制作作品について語りギャラリー・トークを展開することは、一般的な鑑賞とは違った形があると考えられる。

(1) 表現の意図への共感的理解

進行役が自身の作品制作における表現の意図を、鑑賞者に語りかける場面は多くあった。例としては「太陽の明るい光がさし込む様子がきれいだと思います、絵に描いてみました。」という制作への動機や「優しい感じのする空を描きたかったので、おだやかに色が変わるようにしました。また粘り気のある油絵具を使って画面がツルツルになるようにしました。」といった表現における工夫に関連したものもあった。

学校の内外を問わず美術教育の場において、子どもが作家の表現についての意図を知る機会は少ない。学校では自己の表現について考え制作することを学ぶ機会は多いが、他者が何を考えて制作しているのかを知る場面は限られる。図工美術の授業で関わりのあるクラスメイトや、授業を担当する教師との交流によるものが主であると考えられる。時には過去の巨匠の作品を鑑賞し、それらの意図を知る機会もある。しかし、美術史家によって明らかにされた作者の表現についての意図も、残された文献などの資料に基づき第三者的に読み取られたものであることが指摘される⁶⁾。制作者から発せられる生の言葉こそ、作品に込められた本当の意図である。これらから、作家が何を考え、どのような思考の過程を経て作品を制作しているのかを理解する機会が必要となると考えられる。

なお図画工作科の教科書には、作家が自身の作品について語るといった内容が含まれているものも

ある⁷⁾。これらは表現について理解を深めることのできるものであるが、教科書には紙面に図版として載せることになるため、作品のそのものの造形的な要素は実物よりも伝わりにくい。また文章であるゆえ一方的な解説となり、疑問や気づきを投げかけることはできない。やはり実物の作品を携えた作家と子どもが直接対話し、相互に意見を述べ合う交流をする場が求められる。

また、ギャラリー・トークにおいて筆者が作品について語ると、子どもらが共感を示す場面がみられた。特に上記の例のように、作品に込めた意図について語った際、声をあげ強い反応を示していた。表現への意図を知ることには、教育的な意義があると考えられる。このことを「追体験」という心の作用に関する概念から記す。

新井秀一郎によると追体験には2つの意味があるとされており、その一つに「表現過程の同時的追体験」がある。これは「作品そのものの表現過程を部分的にではあっても心の中でたどることにより、いっそう強い感動や興奮をもってその作品の美を享受する」ことであると述べられている⁸⁾。この追体験をさせることにより、展示作品への感動から美術全般を愛好する心情に発展させることや、自身の制作への動機を高めることが可能となると考えられる。作品の現物を観ることに加え、制作者が表現過程を生言葉として鑑賞者に合わせ柔軟に語ることは、より深い追体験を可能とすると考えられる。よって作家と子どもが直接対話し、交流することは意義のあることだといえるだろう。



図10 進行役とともに作品の画面に触れる子ども

実践における印象的な一場面をあげる。本ギャラリー・トークは作家が居合わせており、その了解に応じて作品に直接触れることも可能であった。これは図版や実物を目でみることによる鑑賞とは別の体験を可能とする。2校目である本巣小学校では対話形式であったこともあり、触れさせることを行うことができた。子どもは画面に触れると「ツルツルしている」や「ザラザラしている」などと、感触をつぶやいていた。これにより、見ただけではわからないマチエールなどの特徴を感じ取っていた。このとき、表現の意図を語りかけると、子どもは一層強く共感するといった反応をみせていた。表現過程をより深くたどり、さらなる追体験を生むことができていたと考えられる。

(2) 鑑賞における場の在り方

ギャラリー・トークでは作家が鑑賞者の多様な感じ取り方から、自身の作品に対するさらなる発見をしていた。子どもが制作の意図を知る機会が少ないように、作家も自身が制作した作品を鑑賞者がどのように受け取るかを知る機会もまた少ない。双方の発言からなるギャラリー・トークという場により、鑑賞者は発信者の意図を知り、作家は受け取り手の感じ方を知ることができた。これは今回のような場がなければ生まれなかったものであり、両者にとって貴重な体験となったといえる。

しかし対話の在り方においては、あくまで筆者が質問をする役であり、鑑賞者が回答役であるという関係の体系が自然に構築されてしまっていたことは検討すべき点としてあげられる。作家が作品を持ち寄るという性質上、子どもは進行役が質問の答えを全て知っているという意識を持つことになる。よって、作家は場における授業者的な立ち位置にあった。その結果としてギャラリー・トークにおける会話は、その場毎に応じて異なった内容となったが、多様な解釈が生まれにくい傾向があったとも考えられる。

一方、実践において子どもらの気づきに応じて展開される場面もみられた。それは進行役が鑑賞者とともに作品を取り囲む体形となっているときによくみられた。この体形においては、進行役と鑑賞者という立場が目立ちにくくなり、相互による対話が促進されていたと感じられた。よって、その場

に居合わせた多くの者が活発に発言し、子ども同士で意見を投げかけ合う姿も生まれたのだと考えられる。

今後、学校における鑑賞教育はあらゆる方向へ発展していくと予想される。本実践はその一例といえる。作家と子どもという関係を生かした学びの可能性を明らかにすることと、双方がより活発に交流することのできる場の在り方を模索していくことは、より重要となると考えられる。(山田)

3. イラストレーションおよび写真表現作品によるギャラリー・トーク (実践者 加藤司)

3-1 実践の概要

学校美術館は、作家作品を校舎内に展示し、文字通り学校を美術館にする試みである。本実践では学校美術館を開催しつつ、さらに作者が子ども達とともに、作品の感想等を交流させていく対話型のギャラリー・トークを試みた(図12)。本章では筆者のデザイン作品の展示とギャラリー・トークに焦点を当てて記述する。

筆者はこれまでに、主にデザイン分野の作品を制作しており、広報写真の撮影や、商品のパッケージデザインも行っている。展示作品は、イラストレーションによるシリーズ作品の『そうぞうぶつたち』と、写真表現によるシリーズ作品の『faceless』である。まず『そうぞうぶつたち』について紹介する。『そうぞうぶつたち』はF30号キャンバスに、アクリル絵の具によって想像上の生物を描いた、6枚組のイラストレーションである(図13、また展示の様子は図12も参照されたい)。1枚のキャンバスにつき1体の生物を描いているが、その全てに生態や骨格、生物学的分類を設定している。さらに表現を写実的にすることにより、全くのオリジナルの生物でありながら、実在するかのように見せるのが、本作品のねらいである。『そうぞうぶつたち』という題名は、生物は全て神の創造物だとするキリスト教の教義を引用し、想像物との掛け詞にしている。

一方『faceless』は建物の壁面を撮影した一連のモノクロ写真である(図14、及び図12の右端)。写真の枚数は全部で27枚あるが、学校美術館では内6枚を展示した。被写体である建物は、あえて無個性で古びたものを選定している。よって被写体は街中にありふれているものであるが、多くの人が見向きもしていないものとも言える。このような魅力を欠く被写体に対し、筆者は窓枠や配管などが構成する、幾何学的な造形の美しさを見出し、これを写真によって提示することを構想した。被写体の造形を強調するために色彩を消去し、撮影は全て真正面からに統一している。『faceless』という題名は、個性や特徴のない様を意味する形容詞であり、作品にふさわしいと考えた。以上のシリーズ作品を含め、複数の作家作品を学校美術館で展示し、ギャラリー・トークを実践した。



図12 笠松小学校でのギャラリー・トークの様子



図13 『そうぞうぶつたち』より“デフォルモテリウム”



図14 『faceless』の一枚

3-2 実践の方法

本実践は笠松町立笠松小学校、本巣市立本巣小学校、弥富市立十四山東部小学校の児童を対象に行った。笠松小学校と本巣小学校では、筆者の二つのシリーズ作品を連ねて展示し、ギャラリー・トークも連続して行った。十四山東部小学校のみ、展示スペースの状態から、二つのシリーズ作品を離して実践を行った。一度のギャラリー・トークにおける対象児童数は、笠松小学校が一学級分の約35人であり、残りの二校は約10人程度であった。

実践では作品の前に子ども達と集合し、作品の感想や意見を交流、発展させていった(図15)。例として笠松小学校における『そうぞうぶつたち』のギャラリー・トークの展開を以下に記述する。①作者の自己紹介。子ども達から作品について「イルカみたい」「ラクダみたい」など、似ている動物についての想像や、「CGみたい」「本物みたい」「可愛い」「きもちわるい」といった感想が続出する。②6枚の中から注目して鑑賞する作品について子ども達に選んでもらう。③前述した「イルカみたい」や「可愛い」といったような感想は、主にどの部分についてかを聞きながら、鑑賞を深化させる。④筆者が、実際にどのような動物をモデルにしたか、どのような考えをもって描いたのかについて説明し、ギャラリー・トークをまとめる。

一方で本巣小学校での『faceless』のギャラリー・トークは、次のような展開であった。①作品がどのようにして作られたかを子ども達に問いかける。多くは「写真」と答えたが「絵」と答えた子どももいた。②筆者から、写真は絵と異なり、架空のものを表して作品にすることはできないことを説明する。③写真が架空のものでは無ければ、何を写しているのかを子ども達に問いかける。子ども達からは「工場」「ぼろぼろの家」「ビル」という答えが出る。筆者はこれらをまとめながら被写体は身近にあるものだと説明する。④なぜ筆者が身近にある古びたものを撮影したのかを説明し、ギャラリー・トークをまとめる。

どちらの作品においても、子ども達との交流をもとに実践を展開している。したがって、対象となる学校及び児童によって、展開の違いも生じた。例えば笠松小学校では、『faceless』のギャラリー・トークにおいて、筆者が撮影した理由について子ども達と意見交流することができた。子ども達からは「ぼろぼろが好きだから」「パイプなどの、いろいろな物の配置が良いから」という意見が出た。

3-3 実践の考察

実践において、子ども達との対話が発展しやすい作品と、しにくい作品が存在するという印象をもった。筆者は自分の作品以外についてもギャラリー・トークを行ったが、それらを含めて対話が発展しやすいという印象を受けたのは、世界観や物語といった幻想的な要素が含まれる作品や、制作上の背景が鑑賞者を吃驚させるような作品である。前者のような幻想的な作品は、子ども達が「きれい」や「不思議」といった感想を述べるだけでなく、作品の意味や物語、謎を個々に想像できるため、対話を発展させやすいと言える。対して写真や風景画のような写實的、現実的な作品は意見が収束しやすい。また後者のような、制作上の背景が鑑賞者を吃驚させるような作品とは、特殊な材料や方法によって制作した作品のことである。ごく短時間あるいは長時間にわたって制作した作品や、油彩やテンペラのような、多くの子ども達が触れたことがないような材料による作品は、興味を引きやすい。対して、このように好奇心を刺激する制作背景とともに語れない作品も当然存在する。

一方で実践において、他の作品と比較しながら語りを展開することの有効性についても確認している。筆者が展示した二つのシリーズ作品は「イラストレーション(虚構)に対する、写真(現実の記



図15 アングルについて考える子ども達

録)」「豊かな彩色に対する、モノクロ表現」「リアルなイラストレーションに対する、絵のような写真」といったように相反する要素を含んでいた。この性質の違いは、筆者のギャラリー・トークにおいて表現の特性や、それによる作者のねらいを考える上での手がかりとして有効に機能していた。

実践の成果としては、作品による鑑賞のしにくさを感じながらも、対話を通して深化した鑑賞が行えていたことがあげられる。二つのシリーズ作品について、そのモデルや被写体を予想する発言は子ども達の間で伝播し、競い合うように様々な意見が飛び交っていた。これは粛々とした鑑賞ではなく、対話型のギャラリー・トークであるからこそ可能だったと言える。特に『そうぞうぶつたち』の実践では、「背中がラクダみたい」「腕がゴリラみたい」といった細部に注目した意見が頻出していた。

しかし対話型のギャラリー・トークには困難な点もある。筆者は、作者の説明ではなく、子ども達の感想の交流を主体にする実践を構想していた。しかしこの場合、参加する児童数が多いほど、作者(授業者)が主体となる必要が出てくるのである。児童数は少ないほど、個々が発言する機会が多く、その発言がギャラリー・トークの展開に反映されやすい。逆に児童数が多いと、それだけ多様な意見が混在することになり、作者(授業者)が発言量を増やし、展開を主導していかなければ収拾がつかなくなってしまう。その結果、実際に意見が出せない子どもや、鑑賞に集中できない子どもが発生してしまった。多人数でギャラリー・トークを行うためには、何らかの手立てが必要だと考えられる。

今後も作品の種類や、参加人数によって発生するギャラリー・トークの障害について解決策を探りながら、美術作品と子ども達を繋げる実践を行っていきたい。(加藤)

4. まとめ

本稿で取り上げた2名のアーティスト及び実践者(山田、加藤)は、岐阜大学大学院教育学研究科に在学する大学院生である。美術教育を専攻しているため、学部1年のときから造形の各分野についての制作に取り組んでおり、作品発表の実績がある。また、アーティストに相当する実技経験を持ちながらも、同時に教育実践者としての力量も高めている。これまでも教育実習や学校への出前授業を通して、多くの人達に美術の魅力を伝えようと取り組んできた¹⁰⁾。二人ともに将来小・中学校で教職につくことを意識しながら、大学院で美術の制作を継続している。学校美術館は、美術制作と教育実践とを結び付けるよい機会になったと考える。

教育実習や出前授業においては、子どもたちの感想や意見を引き出すこと、子どもたち相互の交流から学び合いにつなげることをめざしており、その成果は「学校美術館」の実践においても見受けられた。ただし、「学校美術館」では、いろいろな学校・学年・学級・グループの子どもと接して、一期一会的にギャラリー・トークをすることが求められる。その場に応じた適切な対応をどのようにしていったらよいかについて、新たに課題意識をもっている。作品を前にして一斉に解説をするよりも、子どもたちとの対話を通して、感想や気づいたことを引き出すように心掛けていた。

同じような内容と方法で語りかけているつもりでも、子どもたちの反応は多様である。作品によっても語りかける内容や子どもたちの発言は異なる。このように、鑑賞活動においても一人ひとり個性があることに気づいたことは、授業実践から得たことである。また、学校美術館の授業実践に参加することで、多くの大学・美術館・学校にいるスタッフとも交流し、教育内容や方法の充実に向けた実践上の手立てが見つかった。これまでは、「学校美術館」の授業時でのかわりか中心であったので、事前の企画や準備、事後の省察と改善を含めた実践全体のコーディネートも経験できるようにしていきたい。(辻)

注

- 1) 平成28年度に既に行われたギャラリー・トークの日程、学校、参加者等は、下記のとおりである。
 11月28日(金) 2・3限 笠松小3年(33名) 4年(41名) 5年(42名)
 スタッフ：辻、河合、早矢仕、林、新實、山田、加藤、箕浦、樋口
 11月2日(水) 5・6限 笠松小1年(23名) 2年(38名) 6年(45名)
 スタッフ：辻、家田、浅野、早矢仕、堀、加藤、山田、奥田
 11月24日(木) 2限 本巣中2年1組(35名)、3限 本巣中2年2組(35名)、
 4限 本巣小4年2組(28名)、5年1組(30名)
 スタッフ：辻、河合、福井、林、早矢仕、浅野、廣瀬、箕浦
 11月25日(金) 3限 本巣小学校 4年1組(27名)、4限 5年2組(30名)
 スタッフ：辻、早矢仕、新實、山田、加藤、岡本
 12月7日(水) 5限 十四山東部小 4年1組(28名)
 スタッフ：辻、浅野、江村、新實、水谷、藤田、堀、近藤、山田、加藤
- 2) 辻泰秀 山本政幸 浅尾知子「地域における『学校美術館』の構想と準備—地域の学校やアーティストとの連携—」岐阜大学教育学部 教師教育研究 9 2013 pp.45-54
- 3) 村上タカシは、1994年と1995年に東京都杉並区和泉中学校で「IZUMI WAKUプロジェクト」を実践している。作家を招き、学校を美術館とする試みの先駆的な例である。
- 4) NPO法人である「芸術家と子どもたち」は、2000年から「ASIAS『Artist's Studio In A School』」としてワークショップ型の鑑賞授業を実施し、アーティストと学校つなぐ活動をしている。NPO法人 芸術家と子どもたち 公式HP <<http://www.children-art.net/>> 参照
- 5) 加茂千景 高橋智子「作家と連携した鑑賞授業の取り組み—静岡大学教育学部附属島田中学校での実例研究—」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 NO.24』2015 pp. 133-143
- 6) VTC (Visual Thinking Curriculum) の第一人者であるアメリカ・アレナスは、対話型鑑賞において専門的な知識に関する問いかけは避けるべきであると主張している。それに対して、知識・情報をトークの流れに応じて提示することで、鑑賞活動をより実りのあるものにできるという意見もある。吉田貴富「対話的ギャラリー・トーク型鑑賞指導における進行役の要件について」『美術科教育学会誌 美術教育学 第30号』2009 pp.439-452
- 7) アレナスは鑑賞教育の在り方について述べるにあたり、美術の専門家達による解釈にさえずれがあり、それぞれ異なった見方によっていると指摘している。アメリカ・アレナス『みる・かんがえる・はなす 鑑賞教育へのヒント』木下哲夫訳、淡交社 2001 pp.48-49.
- 8) 日本児童美術研究会『図画工作 5・6上 見つめて 広げて』日本文教出版、2015 pp.48-49
- 9) 新井秀一郎は、児童期以後における鑑賞の発達を段階的に考察しており、その中で表現の追体験について述べている。2つある追体験の作用のうちのもう一方は、「自然観照の上での追体験」とされている。新井秀一郎『実践造形教育体系 25 美術の鑑賞』開隆堂出版株式会社 1982 p.22
- 10) 在学中に取り組んだ鑑賞教育の実践については、たとえば「作品楽しむこつ 大学生から学ぶ 岐阜日野小児童」中日新聞 2014.10.18 岐阜近郊版、「美術鑑賞会 弾むトーク 岐阜大で展示解説、学生交流」岐阜新聞 2014.12.25 地域総合版、「教室がギャラリーに 岐阜大学教育学部 学生の絵画や彫刻展示」中日新聞 2014.12.25 岐阜近郊版、等に紹介されている。

付記

28年度の「学校美術館」の実践に際して、笠松小学校、本巣中学校および本巣小学校、十四山東部小学校の教職員の方々にご理解ご協力いただきましたことに、厚く感謝申し上げます。